

「トポス」の展開:アリストテレス、ベルクソン、西田

名古屋大学大学院文学研究科哲学専攻博士後期課程 1 年

Felipe Ferrari Gonçalves (フェリペ・フェハーリ・ゴンサルベス)

『ティマイオス』において、プラトンは $\chi\acute{\omega}\rho\alpha$ (空間) とは何かを説明した。彼によると、 $\chi\acute{\omega}\rho\alpha$ は確かに存在し、含まれているものと同じ形がある空間の部分である。すなわち、それに含まれているものの $\delta\epsilon\chi\acute{o}\mu\epsilon\nu\omicron\nu$ (受容者) であり、感覚することも、理解することもできないものであり、ある「第三の類」[$\tau\rho\acute{\iota}\tau\omicron\nu\ \gamma\acute{\epsilon}\nu\omicron\varsigma$]のようなものである。空間も質料[$\acute{\upsilon}\lambda\eta$]もものの存在のために必要なものであるので、アリストテレス質料としてプラトンの $\chi\acute{\omega}\rho\alpha$ を考えた。一方、アリストテレスは $\chi\acute{\omega}\rho\alpha$ をではなく、 $\tau\acute{o}\pi\omicron\varsigma$ (場所) について、論じた。彼の『自然学』における $\tau\acute{o}\pi\omicron\varsigma$ は「受容者」ではなく、ものの最端の面 [$\tau\omicron\upsilon\ \pi\epsilon\rho\iota\epsilon\chi\omicron\nu\tau\omicron\varsigma$]すなわち、物体を包む二次元的な面の結合である。

1889 年の『アリストテレスの場所論』という論文において、ベルクソンは「場所」の問題の起源を分析し、哲学的議論の中でその役割を説明した。彼によると、自然学や形而上学を正しく研究できるように、我々は「空間」ではなく、物事の個々の「場所」の問題に集中しなければならない。プラトンやアリストテレスと同じように、西田によると、有るものは必然的にある場所に於いてある。彼によると、「意識」というのは、ものが存在し物事との関係が行う場所であるので、すべての存在するものが意識の内に於いてある。『善の研究』で説明しているように、有るもの——すなわち、我々はリアルとして解釈し得るもの——は全ての意識によって認識され得るもの——外的の自然現象から、我々の内的意志まで——である。それらは全て意識現象であり、全ての存在するものは場所に有るので、全ては意識の内に存在しなければならない。もし物事が意識の外に存在するとすれば、意識の内には何もなくなり、思考という働きもなくなる。そして、意識の外にある物事があつたとしても、それは場所も存在性も全く持たない。知るもの、知られるもの、情意や全ての現象は意識の内に於いてあり、西田によると、意識というのは絶対的に「場所」である。従って、ベルクソンと同じように、西田において、「場所」というのが確かに哲学の一つの根本的な問題である。

今回の発表の目的は、プラトンの『ティマイオス』における $\chi\acute{\omega}\rho\alpha$ 、ベルクソンにおけるアリストテレスの $\tau\acute{o}\pi\omicron\varsigma$ 、そして西田における「場所」を説明することであり、その三つの概念はどのような関係があるのかを分析することである。